

気象学会オンライン大会後の意見交換会の報告

～稀な機会を今後活かすために～

林 未知也*¹・宇野 史 睦*²・木下 武也*³

1. はじめに

気象学会2020年度秋季大会はコロナ禍により初のオンライン開催となりましたが、運営された方々のご尽力により、大きなトラブルはありませんでした。『講演企画委員会のアンケート』（講演企画委員会 2020）によると、今大会全般について参加者の約6割が満足している一方で、約2割は改善すべき点があると感じています。また、オンライン開催だからこそその付加価値を見出す意見も多く、この稀な経験は現代技術を活かして学会活動のあり方を改めて検討する良い機会だと考えられます。そこで、国内10大学・研究機関から20名ほどが有志で集まり、今大会について意見を交換する会合を2020年11月5日に実施しました。

本会合では、まずオンライン会議ツール『Zoom』（<https://zoom.us>, 2021.1.27閲覧）を利用して、筆者（林）が今大会の特徴と事前に得られた意見を紹介しました。続いて、少人数での会話に適したツール『SpatialChat』（<https://spatial.chat>, 2021.1.27閲覧）も併用し（第1図）、Googleドキュメントで共有設定された『共有ワークシート』（https://drive.google.com/file/d/1uOII-gB5dY6yY4N6NKvLsMGU_-EtMRBT/view?usp=sharing, 2021.1.27閲覧）を参加者らが編集しながら議論しました。

第2節では、本会合から生まれた意見をまとめます。第3節で上述の講演企画委員会のアンケート結果について触れ、第4節で本報告を締めくくります。なお、本稿で紹介するツールや機能、オンライン資料な

どは二重鍵括弧『』で示すとともに、参考URLを初出時に併記または参考文献を稿末に記載しています。

（林 未知也）

2. オンライン大会についての議論

オンライン大会のメリットとして、参加者の居場所を選ばない、必ず椅子に座れる、コロナ禍で「3密」を避けられる（COVID-19の感染拡大を防ぐために「密閉・密集・密接」を避けられる）、同時に複数のセッションを閲覧できる、オンデマンド資料をいつでも見られる、会場費が抑えられるなどの意見がありました。一方で、新しい取り組みによる運営の負担、参加者同士の交流の難しさ、利用されるオンラインツールの多様さなど、懸念すべき点も多く挙げられました。

2.1 オンライン大会の開催方法について

オンラインで開催したことにより運営の仕組みが大きく変化したと考えられます。例えば、大きな会場運営の必要はなくなり実行委員会の運営の負担が低減した一方、オンライン大会システムの作成など、新しい業務が増えたとのことです。今回の運営を適切に評価



第1図 会合で『SpatialChat』を使った議論の様子。

*¹ (連絡責任著者) Michiya HAYASHI, 国立環境研究所, hayashi.michiya@nies.go.jp

*² Fumichika UNO, 日本大学文理学部。

*³ Takenari KINOSHITA, 海洋研究開発機構。

© 2021 日本気象学会

し今後を活かすために、例えば人的エフォートの配分を目に見える形で学会会員に提示することを求める意見がありました。現状では大会運営は研究が本業の方々ボランティアで成り立っていることを踏まえ、今後は会場利用費などの削減分を運営の外注に費やすなど、一部の学会会員に過度の負担をかけない工夫を求める声もありました。

一方、ポスト・コロナ時代にもオンラインと現地開催のハイブリッド大会があり得るとの意見があります。しかし、ハイブリッド型の運営はどちらか一方と比べて実施にかかる人的エフォートや費用に対してどこまで有益かは自明ではありません。その代わりに春季大会はオンライン・秋季大会は現地開催や、オンラインの日・現地開催の日を分けた開催という比較的運営が混乱しにくく、運営に過度な負担がかからない方法の提案がありました。今後は、オンライン化する説得的な理由を提示した上で、できる範囲でWebツールなどの現代技術の恩恵を受けられるような、利便性と継続性を考えた最適な大会開催方法を検討することが求められました。

2.2 オンライン大会システムについて

今大会の円滑な開催を支えるためにオンラインシステムが作成され、特に大会ウェブページは本会合参加者の間で好評でした。このシステムのおかげで、国内外問わず遠方からの参加や、通常業務を休めない方々の参加が可能となりました。そのGoogleサイトや講演方法などは今大会で培われた財産で、例えばこのシステムを学会会員が他のワークショップやシンポジウムなどで利用・改変できるように共有することで、改善策が大会運営へフィードバックされることを期待する声がありました。

システム利用者からのフィードバックは大会前のリハーサル利用後のアンケートからも得られており、リハーサルは参加者の練習のみならずシステムの改善にとって大事な機会となったようです。また、大会中に参加者のソーシャルメディアなどから得られた意見が必要に応じてその都度反映されたことにより、大会の円滑な実施が支えられました。

2.3 オンライン大会での発表形式について

大会中の発表は、Zoomによる4セッション同時の口頭発表(3日間)と、大会システムでのオンデマンド資料閲覧(7日間、大会後に期間延長)で行われました。口頭発表については、日頃からZoomの利用に慣れている参加者にとっては、現地開催と比べて遜色

のない議論の場となりました。

一方で、オンデマンド資料による個々の発表は従来のポスター形式と異なる点が多く、様々な意見が寄せられました。指定された期間にいつでも閲覧できるメリットは大きいものの、閲覧者との活発な議論に至らなかったという感想が多かったのが現状です。本会合では、その改善策について話し合いました。

オンデマンド資料での議論を活発化させるために有効と考えられる方法が以下のように挙げられました。例えば、Zoomで短時間のオンデマンド資料内容を宣伝する時間を設けることで、閲覧数やコメントが増えることが期待できます。また、大会システムのプログラム一覧で主要成果の図表などがサムネイルとして見えると視覚的に興味が湧きやすくなる可能性があります。他に、『Google Workspace(旧 G Suite)』(<https://workspace.google.com>, 2021.1.27閲覧)の機能を利用して自ら宣伝することや、他人の資料へ積極的にコメントを残すことも有効な手段となったようです。雑談スペースとして利用された『Remo』(<https://remo.co>, 2021.1.27閲覧)や『SpatialChat』のようなツールを従来のポスター会場のように利用すれば、聴講者は初対面であっても講演者と会話しやすいかもしれません。講演者の工夫やシステムの改善だけでなく、一人でも多くの講演者および聴講者が、知り合いの少ない若い学生などの初参加者の発表やオンデマンド資料へ積極的にコメントすることも、気象学会の裾野を広げるためにも必要との意見もありました。

2.4 オンライン大会での交流について

オンライン大会で特に難しく感じられたのが、参加者同士の交流です。今回は、RemoとSpatialChatという二つの交流ツールが雑談スペースとして試験的に導入されました。しかし、あまり人が集まらず、今大会では有効に活用されなかったとの意見がありました。本会合では、オンラインでのより円滑な交流方法を議論しました。

まず、雑談スペースに人が参加しやすくなる工夫が必要です。現地開催ではセッションの合間や食事の時間などに自然と人が集まりますが、オンライン大会中の場合は、そのような機会を取るのとは難しくなります。そのため、雑談スペースへ人が集まる動機や動線を作るためには、それぞれのセッション終了後に講演者に利用を依頼することや、相談会や小規模な研究会に利用することなどが有効かもしれません。また、誰がいるか事前にわからないため雑談スペースに入り

くという意見もありました。スペース内の様子が事前に見える仕組みがあれば、話したい相手や知り合いが見つかり、入室する心の準備がしやすくなると思われます。大会システムに掲示板のような機能があれば、「雑談したい」や「しばらく SpatialChat にいます」などメッセージを残せるので、雑談を始めやすいのではないのでしょうか。現状ではオンライン学会で人付き合いを深めることは容易ではなく、現地開催の意義は大きいという意見もありました。

雑談ツールそのものに日頃から慣れておくことも必要です。それぞれのツールの汎用性は限られており、また研究機関によっては利用を許可されないツールもあるため、一元化は難しいのが現状です。今回雑談スペースに利用したツールはまだあまり普及していませんが、昔は個人で所有しなかったパソコンを今では誰もが持ち歩いているように、新しいツールでも十分慣れれば自然と大会中に活用できると考えられます。オンライン研究会等で実際に新しいツールを活用し続けることで、ツールに慣れることはできます。また、どこにいてもインターネットで繋がれる時代ですので、例えば、学会として雑談スペースを会員ウェブページで提供すれば日頃から会員が研究などの会話を自由にできます。そのような環境があれば、ツールに慣れるだけでなく、普段は遠く離れた場所にいる会員同士から研究のタネが生まれるきっかけにもなる、という考え方もありました。

現地開催では、初めて参加する学生であっても先輩や先生から学会大会の過ごし方を自然と学び、多くの研究者らと交流することができました。若い学生や研究者がこの醍醐味をオンライン開催で味わうことは難しく、ひょっとすると今後の研究活動に支障が生じかねない心配する声がありました。コロナ禍が終われば現地開催が可能になりますが、学会として人同士の交流の場を守ることは大切だと、改めて意見が交わされました。

(林 未知也)

3. 学術大会のアンケート結果との比較

本稿の意見交換会で出た意見、気象学会 HP の2020年度秋季大会のページで公開されている『講演企画委員会のアンケート』、また他学会のオンライン大会のアンケート結果(例えば、医師転職研究所 2020)を見比べてみると、オンライン大会のメリット・デメリットとして参加者が感じている部分はおおよそ共通して

いました。

他学会のアンケート結果でのみ話題に上がっていた視点として、1. 子育て(親の介護も同様か?)世代、2. 企業展示の項目、が挙げられます。1は育児中での移動時間が不要で参加しやすいというメリットが報告されており、2は測器などの実物が見られないというデメリットが挙げられていました。今大会では、初のオンライン大会ということもあり、企業展示やルートブースは実施されませんでした。今後オンライン大会を継続する場合には、このような講演以外の催しについても議論が必要かと思えます。

オンライン大会のメリットとして多くみられたのは、本務の都合や遠方による時間的・経済的な制約が緩和される点や、オンデマンド資料はじっくり内容を閲覧できる点などが挙げられます。一方、第2節でも述べたように参加者同士の交流の難しさをデメリットとして挙げられていました。つまり学術大会の役割として情報収集もしくは人材交流のどちらを重要視しているかで、オンライン大会に対する印象が変わるのかもしれない。

また講演企画委員会のアンケートの記述欄にはオンライン特有の問題として講演ファイルの図表の位置ずれや文字化けなども報告されました。これは講演資料をPDF化することで解決できました。このようにオンライン特有の様々な技術的なトラブルも生じますが、回を重ねることで解決する問題も多いと思われます。橋本ほか(2021)は気象学会員であれば無償で利用可能な Google Workspace を利用したオンラインワークショップのワークフローを例示しています。このような情報の蓄積・共有によりオンライン大会の実施方法が改良されていくと思えます。

意見交換会のワークシートやアンケート結果を見ると(是非、本稿を読まれた後にアンケート結果等もご覧頂ければと思います)、オンライン大会や現地開催にはそれぞれ良さがあり、大会参加者それぞれに多様なニーズがあることがわかるかと思えます。著者(宇野)はわずか数年足らずではありますが講演企画委員会事務局として微力ながら携わっているなかで、学術大会だけでなく学会運営が多くの方のボランティアで成り立っていることを感じており、今回のオンライン大会の開催や意見交換会・アンケート結果から、よりよい持続可能な学会の形を考えさせられる良いきっかけとなりました。

(宇野史睦)

4. おわりに

2020年度は秋季大会を含め、多くの研究集会在オンライン開催となりました。口頭発表ではZoomを用いた形が普及しつつあるようですが、ポスター発表については、スライド形式や『iPoster』(<https://iposter.sessions.com/>, 2021.3.3閲覧)を利用するなど多様な方法が取られているように感じます。今後、気象学会の大会がどのような形で開催されるかにつきましては、理事会を中心に進められることと思います。改めまして、今大会を運営された関西支部と各委員会の皆様、本会合に参加された皆様に感謝いたします。

(木下武也)

参 考 文 献

- 医師転職研究所, 2020:【医師1,846名調査】学会や研修会・セミナーのオンライン化は推進すべき?
<https://www.dr-10.com/lab/online-academic-conference/> (2021.5.27閲覧)
- 講演企画委員会, 2020:日本気象学会2020年度秋季大会アンケート結果のまとめ。
https://www.metsoc.jp/default/wp-content/uploads/2020/11/Metsoc2020a_QuestionnaireResults.pdf (2021.1.27閲覧)
- 橋本明弘, 中井専人, 山口 悟, 本吉弘岐, 2021:降雪・積雪系オンラインワークショップ2020報告. 天気, 68, 13-15.